

# 「はちみつ屋」看板守る

ハチ屋さん  
を追う

⑩

国道38号沿いに立つ、緑色の屋根が特徴的な幕別町の「ナルセ養蜂場」。約50年前までは季節の花の蜜を求め、ミツバチとともに日本を縦断する転地養蜂家だった。今は同町に根を下ろし、販売専門店として、13種類もの蜂蜜をそろえる。「蜂蜜は花によつて香りや色がまるで違う。それぞれの個性を味わって」。店に立つのが、3代目の成瀬一軌さん(35)と妻潤姫(ゆに)さん(36)だ。



「ミツバチがとつてきた自然そのままの味を楽しんで」と話す成瀬さん(左)と妻潤姫さん(塩原真撮影)

もともと東京の看板職人。ぜんそくを患い、自然の中で生활したいとの思いから日中戦争前に養蜂家に転身した。甘いものが極端に不足した戦中戦後は蜂蜜が重宝された。よく採蜜の手伝いに行つた伯母によると、一升缶(1・8㍑)の蜂蜜が、10倍の一斗缶のコメと交換できた。そ

れだけの価値があつただけに、列車で輸送中に中身を抜かれることも。「自分の蜂蜜を守るために、一斗缶を両手に持つて抱えて、売り歩きながら移動したと聞きます」鹿児島を拠点に、岐阜や青森などで蜜を集めながら上。夏の4カ月間を、今の店

と、体力面に不安を覚え、1968(昭和43)年を最後にミツバチとの旅はやめた。だが十勝の人と自然が気に入り、鹿児島の家を引き払い幕別に移住。知り合いの養蜂家から蜂蜜を仕入れ、販売業に専念した。

売る」とことで支える

講がある幕別町内で過ごした。「家は掘つ立て小屋のよう。『十勝はちみつ屋』と書くだけで郵便が届いた」浩さんが60歳近くになるだけで、体力面に不安を覚え、1968(昭和43)年を最後にミツバチを飼いたいとの思いを抱く。だが、「新規参入は難しい世界」と夢はいつたん封印。「養蜂をやっている人の中には販売が苦手な人も多い。小さな養蜂さんの力になりたい」と話す。

今も毎年、道内で養蜂家の作業を手伝いに行く成瀬さんは「黒糖のような風味のソバや、香り豊かなシナなど、蜂蜜はたくさんの種類がある。対面で販売しておいしいと言つてくれるのが一番のやりがいです」。はちみつ屋の看板を守り続ける覚悟だ。

(随時掲載、高田晃太郎)



ナルセ養蜂場 幕別

看板職人から転身

成瀬さんの祖父浩さんは、

「朝食べるパンに蜂蜜。風邪を引くと薬代わりによくなめた」。子どもの頃から蜂蜜を身近に暮らしてきた成瀬さんが、父光昭さんの後を継ぐ考えはなかった。夢はプロダンサー。東京の専門学校に通い、米国に短期留学もしたが、「やがて諦めもつき、店をつぶしたくない」との思いから3代目になることを決心した。